



第131号

〒733-0032 広島市西区東観音 8-10

ワールド・フレンドシップ・センター

理事長 森下 弘

TEL (082)503-3191

FAX (082)503-3179

E-Mail wfchiroshima@nifty.com

<http://www.wfchiroshima.net>

不思議の国で祝うクリスマス

ドン&ポーリン・ヘス



WFC創立者バーバラ・レイノルズに謝辞を述べる森下先生
(通訳者：山下美枝子さん)

日曜日の朝に降った6インチもの積雪(この冬3度目)の中、12月18日に開催されたWFCクリスマス会は大成功を収めました。これは12月には異例の2度目の積雪でした。

クリスマス会プログラムは、クリスマス劇、独唱、クワイアー、ピアノ演奏から成り、参加者全員でクリスマスを祝いました。まず森下先生によるキャンドル点火、若き日のバーバラ・レイノルズの話、WFCに対する彼女の考えについて話があり、次に木戸さんが原田先生についての話をされました。ポーリン英語朗読、知鶴子さん通訳によるクリスマス劇をWFCメンバーが演じ、ピースクワイアーが賛美歌を熱唱しました。

スティーブ・リーパーと奥様のエリザベスが歌とギターで私たちを大いに楽しませ、サンタクロースが出席者全員にプレゼントを手渡しました。山根美智子さんが司会を担当し、クッキーや飲み物もふるまわれました。悪天候にもかかわらず、クリスマスの精神にあふれる楽しいひとときになりました。考えも暮らしも

異なる国の多くのすばらしい人たちと知り合い、文化的相違を理解することは私たちにとって大きな喜びです。私たちは多くのことを学んでいます。



ワールドフレンドシップセンタークリスマス劇出演者
(司会者：山根美智子さん)

アメリカ人学生宿泊客の感想

マテュー・アーロン・マックビカー
(マサチューセッツ州)

私の人生は人々の親切と美しさに満ち満ちていると自覚したのは、昨日宮島の山頂でのことでした。登るのは大変でした。あまり朝食を食べていなかったもので登るごとに足がふらつきました。やっと山頂に着いたとき、すばらしいとしか言いようのない景色が一面に広がり、丁度登ってきた一人の日本人女性に出会いました。私たちは挨拶を交わし、すばらしい景色を座って眺めていました。するといつのまにか彼女は1杯のコーヒーと食べ物がいっぱい入った袋を1つ私に持ってきてくれていました。なんと優しい！この2週間にわたる旅行で私は見知らぬ人から絶えず親

切や思いやりを頂いています。そして私は旅行で私を変えるのは困難や苦しみではなく、愛というもっと強い力であることに気付いたのです。この山頂での体験は平和公園を訪れた時にも味わいました。

私は最初緊張して平和公園に行きました。そこで見るものはぞっとするほど悲しいものだということを知っていたのでからです。原爆ドームから原爆の子の像へと歩いて行きました。記念碑の説明文を2行読んだだけで私は涙が出てきました。記念碑を見ようとするたびにさらに涙が出てきて、私はそばのベンチに座りすすり泣いていました。10分ぐらいたったころ1人の少女が母親と一緒に近づいて来ました。少女は少し緊張しながらも私を気遣っているように見えました。思い切って手を差し出し私に小さなキャンデーをくれたのです。私はありがとうと言おうとして口を開くとさらに涙が流れてきて満足にお礼を言うことが出来ませんでした。

やっと涙は乾き、残りの碑を見て記念資料館に行きました。1945年あの日起こった事はすべての説明文に、また厳かに展示されている血の痕のある制服の中にあります。そして今やその教訓も明らかです。私たちは究極の悲しみや恐怖に直面した直面してきましたが、さりげない言葉や行動の中に希望があります。世界平和を追求するためには私たちの周りにある親切の賜物や、見知らぬ人に優しくする私たちの潜在能力に気付き心を開いていくことです。世界平和は心の中から芽生えます。私は、私を手伝い助けてくれた人々——例えばあの腕を伸ばしてお菓子をくれた子供たちや、家庭的にもてなして下さったフレンドシップセンターの館長夫妻——が戦争や兵器による恐怖や暴力に直面しなくてもすむように、その目標達成のために一生懸命努力するつもりです。

私の広島での体験はすばらしいものでした。私はきつといつかまた戻ってきます。私を手伝って下さった、また手伝おうとして下さった皆さんどうもありがとうございました。



として又是非戻ってきたいと言っていました。

(編集者付記)

Matthew は水曜日午前の英語クラスにも参加し、沢山の質問にも深く答え、日本語をしばしば交えて語り教師

広島平和紀行

Rev. Oh Sang Yeol 寄稿

森下弘

要約



仁川国際空港から広島空港まではわずか1時間20分の距離です。日本と韓国はそれほど近い国でありながら、過去の36年間の日本の統治支配、の歴史的事実、その結果、広島長崎に原爆が投下され、それが韓国の開放をもたらしたといった韓国の人々の受けてきた教育、一般的感情、それらが歪曲されたり、高まるとき、お互いは遠い国となります。

私の個人的認識も韓国人の一般的なそれとあまり変わりませんでした。

しかし大学時代に読んだ永井隆博士の「この子を残して」、日本文化の開放以後接した宮崎はやおさんの反戦、平和、人間と人間、自然の和解を表現した多くのアニメ作品、三年前の東京、名古屋、大阪などでのホームレスとの出会い、などで私の認識は変わってきていました。

が、昨年、「はだしのゲン」を読んで、私たちと同じ、平凡に生きている「人間」が無惨に殺され、苦しめら

れ、しかも苦勞して生きる中で愛を分かち合う姿がはっきり見えるようになりました。そしてまた、韓国にきた山根美智子さんたちとの出会いもまた特別な意味がありました。日本の統治支配、日本軍慰安婦問題、原爆の非人道性についてさらに理解し合いたいとの思いが今回の広島訪問に繋がりました。

「はだしのゲン」ですではっきりと事実描写に接していたので原爆資料館では特別な感慨はありませんでした。

山岡さんの被爆証言、宮島を案内してくださった知鶴子さん、森下さん、茶席の接待の木戸さんの親切、WFC のドン館長夫妻の歓待、バーバラさんについての話に感動しました。今回の紀行を通じて人々が直接出会って心を開くことの大切さを知りました。

まだ色々曲折はあるかも知れませんが、WFC とヨウル教会の相互の交流を持続することで、平和への道を歩むこと、最も近い国になることを確信し、希望しております。

退役軍人の平和への思い

ドン ヘス

(ポーリンと私が館長に着任して9ヶ月が経ちました。平和の為に働いてきた、退役軍人としての私の考え方を話して欲しいという理事からの要請を受けて、先のフレンドシップアフタヌーンでパワーポイント映写も使って以下のような考えをお話しました。この原稿はその時の要約です。)

退役軍人としては初めてセンターの館長を勤める私がお伝えしたいのは、多くの兵士達は私同様戦争よりも平和的解決を望んでいること、そしてイラクへ兵を送り出すのは米国政府であって軍首脳部ではない、ましてやアメリカ国民ではないということです。

私は23年間陸軍の行政官として勤め、それから退役軍関係者の保健、福利厚生改善の為にロビイストとして働きました。私達みんなの共通の目標は核兵器のない平和であると信じています。

現役時代私はワシントン DC で四度の勤務をしました。三回はペンタゴン、国防総省で、一回はホワイトハウス通信省です。陸軍本部に勤務していた時には、徴兵を撤廃し全員が志願兵となる制度作りにあたりました。成功裏にはこび、それ以降は全ての軍関係者(男女とも)は志願者で、徴兵された者はいません。

アメリカではホワイトハウス、議事堂、ペンタゴンの3箇所が主要決定機関となる最も重要な場所です。戦争のような外交政策の問題は、ホワイトハウスで政策をたて、議会がその政策を承認し、ペンタゴンがそれを遂行するのです。

私は又ベトナムにも従軍し、陸軍技術部隊に所属してベトナム南部で道路建設にあたりました。それらの道路は現在も使用されています。部隊の任務が人命や建物を破壊するのではなく、道路建設であったベトナムでのこの仕事を私は希望しました。

長年こうして勤務している間、私はブレザレン教会(クエーカー、メノナイトと並ぶ三つの歴史的平和教会の一つ)の牧師として多くの教会や、地域及び全国レベルの主だった団体に説教を行ってきました。常に私は平和への強い思いを持ち、平和を願う多くの宗教その他の団体に所属してきました。1980年代、ブレザレン教会内で Veterans for Peace という退役軍人の平和組織設立に助力しました。そして2004年のブレザレン年次大会で、二人の平和主義者と共にパネルディスカッションに参加しました。ブレザレンは、戦争や核兵器に反対だけではなく、如何なる形の暴力にも反対し穏かに実地的な方法で平和の為に努力を続けています。

戦争の文化から平和の文化へと変えるため努力をしている NGO や非営利団体がアメリカには沢山あります。私は退役軍人の全国組織、Veterans for Peace(国連の NGO 組織にも所属)のメンバーでした。丁度、広島がスタートさせた平和都市市長会議の組織も国連の NGO 組織の一員であるのと同じです。Veterans for Peace ばかりか他の退役軍人や宗教組織にとっても、アメリカのイラクへの介入は大きな

懸念であり、イラクから軍の即撤退を支持し、全ての核兵器に反対しています。

これらの組織はこぞって、アメリカの政治模様を平和的手段で変えようとの試みを続けています。その目指す所は、核兵器削減、ひいては廃絶、そしてイラクからの撤退です。

平和運動に携わる多くの日本人のなかに、軍人は殺りくが好きなものだから平和の為に働く事はできない、という考えのあることは知っていますが、これほど真実とかけ離れているものはありません。アメリカ軍男女の55%以上が既婚者で、多くが子持ちです。彼らの心配事は一般の家族の心配事と同じで、子供の教育、モダンな暮らし、良い家に住むなどですが、これに加えて命令か世界中何処へでも移動、という重荷があります。多くが、民間の仕事先から召集される予備兵です。軍が戦争に行くという選択をするものではありません。(政府が彼らを戦争に送るのです。多くの高級将校は米軍のイラク派兵に強く異議を唱えた結果、命令に従うか、さもなければリタイアをと告げられました。多くがリタイアし、自分達の意見をオープンに発言しています。

世界の指導者の多くが戦争は不可避だという考えを受け入れてしまっているように見うけられます。戦争は避けられないだろうと一旦思ってしまうと、ほぼ軍事行動という結末に至るものです。アメリカ社会は攻撃の対象となってもおかしくない状況下にあるといえます。ソ連との冷戦、キューバミサイル危機、湾岸戦争そして9.11は記憶に新しいところです。

アメリカ国内の状況は、変化への機が熟していると思います。ですから、**平和省**の創設を求める法制化が上下両院に提案された事に私は非常に勇気付けられているわけです。

この事が何を意味しているかと言えば、**国防総省**、**国務省**、**国家安全保障省**ほか主要部所と並ぶ内閣レベルの**平和省**であれば、平和の領域がハイレベルの注目度を獲得できるようになるということ、その提案がなされている(法制定の過程に持ち込む)のです。

きわめて重大な何かが起きつつあります——ハリケーンよりも、困窮の時政府に放って置かれた何千という人々の苦しみにも勝る何か。平和省のアイディアは、外交に失敗した拳句の軍事力頼みから脱却できる**新しい方向**へ我々をいざなってくれるものです。

戦争反対のデモ行進をするグループの中にそれがうかがえます。我々の指導者の中にも疑問を投げかけている人達があることや、またアメリカ国民の意識の目覚めの中にもそれが窺えるのです。アメリカ国民は変化への用意ができています。単なる変化ではなく、変革です。戦争が不可避なのは、平和を求める努力を拒否した時のみです。

私達が広島に来たのは、ピースメーカーとしての自分達の経験を生かして、平和国家日本でその文化を経験したいと思ったからです。私は、戦争の恐ろしさ、政治の駆け引き、そしてその結果を直に見てきました。20世紀、種々の戦争の犠牲者は一億人を超えます。大半が民間人、広島長崎の人々のように非戦闘員です。ある時点でものごとは変わって行かなければならないのです。多くの人がNGOや宗教団体などと共に、戦争の文化を変えるよう政府に働きかけ粘り強く活動しています。長期的視野に立てば**平和**しかないのです。今そのプロセスを始められるのか、或いは地球の半分が死ぬまで待てるかの何れかです。

WFC 館長として、ポーリンと私は世界平和への働きをする為に皆さんと忌憚のない話し合いをしっかりとる積もりです。世界中の人達みんなが戦争の恐ろしさを認識し、平和的な紛争解決のために努力すべきだと私達は信じています。

谷本清平和賞

去る11月13日第17回谷本清平和賞の授与式が広島工業大学広島キャンパスで行われ、著名な映画監督である新藤兼人氏が受賞されました。

93歳の新藤氏は、その映画製作を称えられての受賞でした。

広島に生まれ現在に至るまで映画製作の現役である新藤氏は、半世紀の余もその作品を通して戦争の悲惨さ、核兵器の恐ろしさをうたえ続けてきました。『原爆の子』や『第五福竜丸』は最も有名な彼の代表作です。

谷本清平和賞は、谷本牧師の息子さんとご家族により1987年に広島ピースセンターの活動の一環として創設されたものです。ピースセンターは谷本牧師が、平和、愛そしてボランティアの信念を実現するものとして1950年に設立されました。この平和賞は、平和活動、特に広島の前爆に関連した活動の個人又は団体に贈られています。過去の受賞者の中には、ノーマン・カズンズ、フロイド・シュモー、ジョン・ハーシー があります。

ワールドフレンドシップセンターは2000年に受賞しました。今回の新藤氏の受賞を称えて、森下WFC 理事長はじめ山岡さんら理事も出席しました。



彼の映画に山岡さんも登場。別の映画に森下先生の書が取り入れられている。



ピースセミナー レポート

田口知鶴子

WFC の創始者バーバラ・レイノルズの願いは 核兵器廃絶と平和な世界の実現であった。バーバラの遺志を継承する事が WFC の使命である。1990 年湾岸戦争が始まった頃、国内外の戦争・平和に関する問題を学習する場として、ピースセミナーが設けられた。15 年戦争、核問題、チェルノブル原発事故について学習する内に、広島から僅か 80kmの上関に原子力発電所計画がある事をした。11 年余りこれについては継続して講師を招いて学習すると共に、さまざまな時の話題を議論して来た。この1年の学習をまとめると、およそ 次のようなものになる。

① NPT再検討会議決裂から考える事

メンバーの一人が 2005 年 5 月にニューヨーク国連ビルで行われた会議に参加したが、会議は 全く期待を裏切るものでしかなかった。米国は 2001 年の 9.11 事件以来 テロ攻撃に対抗してミサイル防衛構想を強行に推し進め、日米同盟を盾に 日本に矢継ぎ早に協力を押し付ける一方である。小泉首相の靖国神社参拝は 同調の姿勢の象徴といえる。唯一の被爆国日本は、“一寸の虫も5分の魂”の気概を持って、米国と別の形で自国の立場を見出し、遠くても 世界が平和の方向へ向かう道に舵を切るべきではないだろうか。

② 原子力発電所建設計画に反対を続ける上関・祝島の状況

原子力発電は“核の平和利用”の一環と言われるが、使われるウランは 兵器にも容易に転用できる、未曾有の危険をはらんだ物質である。1982 年、中国電力は 岩国基地と隣り合わせの上関町に原子力発電所計画を発表した。その一帯は 瀬戸内海でも最も自然豊かな希少生物の生息地として、生物学上極めて重要とされる地点である。関係する8漁協の中で、建設予定地から 3.5km離れた祝島漁協

だけが単独、計画の白紙撤回を唱え 24 年間 補償金拒否を含め、反対運動を続けて来た。しかし、この所の水温上昇等による漁業不振により、祝島漁協でも欠損金を出すに到り、山口県が 2005 年 1 月に打ち出した 県内 58 漁協の合併に、加入の決断を迫られている。

中国電力側は着々と計画を進め、予定地の 8 割近い土地を買収したとする。それに関して 地元八幡宮の所有地が 建設予定地内にあり、反対した宮司が解雇された。勝手に提出されていた退職願い及び理由書は 偽造物であった。今、当人の林晴彦宮司は提訴中である。また 地盤調査に際し、濁水が垂れ流しにされ、海の希少生物の死骸が散乱しているのが発見されるなど、すでに自然破壊が進行している。

一方 上関町は 交付金約 140 億円(60 億円は後払い)を頼みに町の振興を目指して来た。しかし今、人口は当初の 6 割に減少し、65 歳以上が 47%を占め、原発一本槍の行政の結果、漁協・農協は解散に追い込まれ、若者のいない町になっている。上関は 原発問題が絡んだ 地方破壊の典型であるといえる。前回の上関町長選では 町長が買収の罪で辞任したり、金力による原発行政の実態に町民が気づき始めている。山口県において漁業は重要な産業である。県漁協の合併を機に、県内の漁民が一致団結して 漁業を堅持し、町民が 自らの手で 地域に根ざした産業再建に取り組む事こそが 祝島が長年求めて来た 願いである。

③ 日・韓平和教育シンポジウムの資料から学ぶ

災害や戦火に惑う国をよそに、国内はあたかも平和のように若者は自由と娯楽を求め、快適な暮らしを手に入れる事に気を奪われている。学校はめまぐるしく変わる文科省の教育方針に翻弄され、中立の名の下に 政治的な課題を与える事はタブー化され、子供達は、政治的判断力を身につける機会が得られ難い状況にある。日・韓シンポジウムは、戦前の

日本教育の誤りと今後のあるべき姿を示唆する課題を持つ。セミナーでは これらについてもっと深く学習する予定である。

■冬の大掃除

11月21日月曜日、理事達は掃除道具を手に WFC にやって来ました。館長、スタッフら共々、精力的に畳やふとんの整理点検と取り組み、石油ストーブの掃除、ヒーター、電気カーペット等整えて冬に向かっての模様替えを終えました。又、クリスマス会に備えてクリスマス用品、飾りなど取り出しました。館長にとっては大きな助けとなり、大いなる働き後はみんなで食事と雑談を楽しみました。

大掃除、新たな必需品の購入などで冬季へ向けた準備ができました。この必要不可欠な仕事を手伝ってくれた皆さん(食事には残れなかった人もいました)に多いに感謝しています。

■国際交流の日

国際センターでの *国際交流・協力の日*に参加したことは本当に楽しい経験の一つとなりました。イベントで着物を着せてもらい、色々な国々の文化の違いを目の当たりに、楽しい2時間を過ごしました。WFCの人達もたくさん出席していましたが、来年はもっと積極的に参加してテーブルやブースをはりセンターの活動をより広く知ってもらえるようすべきだと思います。

■アリス・ラムザイヤーさん来広

アリスとお嬢さんのスーを囲んで歓迎夕食会をもちました。以前理事を務めてもらっていたアリスの何年かぶりの広島訪問でした。古い友人達が集い、2時間の団欒で再会を楽しみベネフィットホテルで伝統的な和食のディナーを共にしました。

■4月のフレンドシップ アフタヌーン

『伝えるのは誰』という被爆者についての映画を制作されたケイダー&スー・キャノンさんと連絡を取りました。彼らは映画と平和の対話を含むこの独創的な平和プログラムを紹介するために日本に来られます。4月15日、WFCでフレンドシップ アフタヌーンの行事として理事会でこれを了承しました。さらに、

キャノン夫妻はWFCに滞在して平和公園を訪れ、また、広島やそのほかの地で諸団体と交流の機会を持ち彼らのプログラムを紹介される予定です。ステイブ リーパーさんは彼らの平和メッセージを出来るだけ多くの人々に伝えられるように助力することを承諾されました。

■協力、支援を惜しまない WFC



作家のケニー・フライさんはアメリカからフルブライトで来日し、彼の新作「玄

関」を書くための調査研究で WFC をおとずれ、原爆乙女の資料収集の為山岡さんにインタビューしました。このプロジェクトの通訳は山根美智子さんが務めました。

■アメリカのユース チャーチ キャンプに協力

バージニアの教会主催の夏季キャンプでは、子供や青少年のための平和プログラムを後援しています。このキャンプの為の、平和についての情報や資料などの提供の依頼があり、理事会ではこの計画に同意しました。先ずパンフレットなど情報資料の提供から始め、広島とアメリカの若者達にペンパルを紹介する、それは文通を通して若者たちが個人的に知り合う絶好の機会となり、やがて交換プログラムが可能になるでしょう。教会キャンプは常に平和に重点を置いているので、WFCにとってはさらに新しい活動が増えることになります。

■PAXチームをアメリカへ

私たちの平和の架け橋の仕事として2006年にPAXのアメリカ訪問を計画中です。最後のPAX訪問から5年が経ちアメリカ委員会はPAXの受け入れそれに必要な予定の作成、輸送、その他の準備を承知してくださいました。次のお知らせをお待ちください。

■韓国のPAXチームが来広

韓国のPAXチームが6月か7月に広島を訪問される予定です。韓国との交換プログラムは2003年に始まり2005年2月に WFC のメンバーがソウルを訪問しました。理事会では PAX プログラムのこれからの予定を相談します。平和をめざす仲間に関わり平和公園を案内することを楽しみにしていますし、韓国と日本人々との理解をいっそう深める機会を持ち続けたいと思います。

■韓国からゲストを迎えて

去る2月2日木曜日、韓国の長老派教会の呉牧師を団長とする一行8人のゲストをWFCに迎えました。一行の顔ぶれは、中学校の歴史の先生、理科の先生、歴史を選考する大学生、高校生、2名の中学生、それに小学生です。

WFCでは、メンバーからの歓迎を受け、そこで韓国での活動の紹介がなされました。その後、ドン館長、山根、河野、車地さんの4人のWFCのメンバーがベネフィットホテルにお連れし、日本料理で歓迎しました。

一行は、翌金曜日、羅さんの通訳で、山岡さんの被爆証言を聞きました。そして、山根さんと佐久間さんの案内で平和公園の碑めぐりをした後、各自で原爆資料館を見学しました。

土曜日の午前中は、森下さん、田口さんの案内で宮島観光。午後は、木戸さんのご招待でお茶席のもてなしを受けました。

次の日、広島韓国教会の日曜礼拝に出席し、4日間の日程を終えて、広島空港へと向かい帰国の途につきました。

友愛ボランティア

翻訳 平本隆子、堀益芳子、佐久間佳子

山下美枝子、山根美智子、平岡佐知子

編集 英語版 ドン ヘス

日本語 浜井道子



来広されたアリスさん、スーさんを囲んで



平和公園碑めぐりの学習をするピースガイドグループ



クリスマスパーティーでポーリーンと共に原田先生を
しのんでキャンドルに火をともし木戸さん。



館長たちから日ごろの感謝をこめて理事にケーキが
プレゼントされた



火曜日午前の英会話クラス



年末大掃除を手伝ってくださったみなさんと共に昼食
をとりました